大塚商会の販売最前線からお届けするセールスノウハウマガジン

# Vavigator 65





●巻頭インタビュー

外交ジャーナリスト

国家だけでなく、 企業が生きるためにも インテリジェンスの 活用は欠かせない

●第2特集

Windows XPからのリプレース

OS移行の提案ポイント

●CAD情報

自信をもってお勧めできる高い品質の製品を提供 各種プログラムでパートナー様の

ビジネスを支援する

Navi Value

販売パートナー様限定セミナー

ついに発売!

Windows 8で仕事はここまで変わる!

●SaaSビジネス最前線

**BP PLATINUM Type-S** 

ローコストで、高品質なWeb会議を提供! **『OmniJoin**』

●メーカーズボイス

日本ヒューレット・パッカード株式会社

●広告企画

オフィスのバックアップ環境を見直して 多大なコストや管理負担を解消! バックアップ関連製品 大特集

Presented by

**Otsuka Corporation** 



NHKワシントン支局長として外交の最前線を精緻に取材してきた手嶋龍一さん。現在は外交ジャーナリスト、作家として、数多くのノンフィクション作品やインテリジェンス小説などを手掛けている。一般にインテリジェンスとは、国と国との駆け引きに用いられる情報の武器とされるが、「企業が厳しい国際競争を生き抜いていくためにも、インテリジェンス感覚は磨き抜かれていなければ」と手嶋さんは説く。企業が活用すべきインテリジェンスとはいかなるものか、どう企業戦略に役立てるべきなのだろうか?

# 日本は牙を持たないなら 長い耳を持つべきだ

BP: 手嶋さんはインテリジェンスに関する数多くの作品を著し、大学ではインテリジェンス論も教えています。なぜ日本には、インテリジェンスという名の武器が必要なのでしょうか?

手嶋龍一氏(以下、手嶋氏):いま東アジアの海洋を舞台に、21世紀のグレート・ゲームの幕があがりつつあります。 日本列島を取り囲むように位置する中国、ロシア、韓国、北朝鮮は、日本の政治指導部が衰弱しているとみて、攻勢を強めています。日本の人々は、国境線は変わらないと思っていますが、周辺国は力で押せば日本は引き下がると見ているのです。ロシアは北方領土で、韓国は竹島で、中国は尖閣諸島で攻勢に転じており、日本の国境線は縮んでいると見るべきでしょう。

戦後の日本は、軽武装・経済重視の路線を歩んできましたが、対する中国は、核ミサイルを持ち、新たに空母機動部隊を配備して「海洋強国」の道を歩んでいます。しかし日本も軍事強国を目指すべきか、冷静に考えるべきでしょう。鋭い牙を持たないなら、彼方で兆している異変をいち早く察知する長い耳は持つべきです。経済大国には情報収集の能力は不可欠なのです。

日本は、G8(先進8カ国)の中で唯一、対外情報機関を持っていません。 日本の国内にテロリストやスパイが浸 透してくるのを監視するカウター・インテリジェンスの機関はありますが、米国のCIAや英国のMI6のような対外情報機関はない。これでは動乱の時代を生き抜くことはできません。

# インテリジェンスと インフォメーションの違いは?

BP: 長い耳を備えて、いかなる動きに 耳を傾けるべきなのでしょうか?

手嶋氏:ITの時代となったいま、我々のもとには日々、膨大で雑多な情報、つまりインフォメーションが入ってきます。しかし、どれが重要な情報なのか、どれが単なるうわさ話なのか、漫然と受け取っているだけでは、個々の情報に振り回されるだけです。

膨大なインフォメーションの中から真 贋を見極め、より本質的な情報を選り 分けなければなりません。国家なら国 益、企業であればその利害に照らして、 おびただしい情報をふるいにかけ、そ の意味を考えなければいけない。そう したプロセスから紡ぎだされる貴重な 情報の一滴がインテリジェンスです。

しかし日本語に訳してしまえば、インフォメーションもインテリジェンスも「情報」ということになってしまう。インテリジェンスは、賽ノ河原のおびただしい石ころに混在するダイヤモンドの原石のようなものです。

戦後の日本は真の意味での国家的な危機にさらされることなく、超大国アメリカの傘のもとにひっそりと身を寄せて

きました。国家の命運を賭けた決断を することが少なかった。それゆえインテ リジェンスの訳語ひとつ考えださなかっ たのでしょう。

「情報に同盟なし」という格言があります。同盟国の米国も自らの国益に照らして情報の収集・分析をしているのであり、日本の国益に奉仕しているわけではない。イラク戦争の開戦にあたって、フセイン政権は大量破壊兵器を持っているという米情報は惨めなほどに誤りでした。しかし、日本は独自の情報網を持たなかったため、アメリカの情報に異を唱えることができませんでした。

## BP:企業にとっても、インテリジェンス を紡ぐことは重要なのでしょうか?

手嶋氏: 社運を賭けた決断をしなけれ ばならない時、企業は決断を支える独 自のインテリジェンスが必要です。競合 する有力な他社を買収するかどうか。 重要な決断を下すにあたって、買収の 対象とする会社の情報を徹底的に収 集するはずです。しかし、集めた情報 には不正確なものもあれば、単なる風 聞も混在しているはずです。それらのイ ンフォメーションからインテリジェンスの 原石を選り分けていかなければなりま せん。詳細なバランスシートの数字に、 財務体質の本質を示すものが含まれて いる。それを選り出し、買収に値するの か、見極めなければなりません。インテ リジェンスとは、国家のリーダーだけの ものでなく、経営者のものでもあります。 組織を率いて決断を委ねられし者が、



決定的な決断を下すときの拠り所になるものです。

決断とは、近未来に向かって一歩を 踏み出す営為です。それゆえインテリジェンスは、近未来を射抜く力を持ったも のでなくてはいけません。情報を組織 全体に行き渡らせる機能、そう新鮮な 血液を体中に巡らす心臓のような機能 が、インテリジェンス・サイクルです。この 情報の心臓にあたるのがインテリジェンス・サイクル。この回路が粛々と機能し ている組織は強い。大災害に見舞われ たときに、企業のリーダーは、企業を存続させるために迅速に手を打たなければなりません。そのためにはまず、最前線で何が起きているか、適確な情報をつかみ、そこから対処方針を考えだし、現場に指示を与えなくてはいけない。

一方で決断すべき者に情報を届ける人々の練度も高めなければいけません。とりわけ報告は簡潔なことが肝要です。だらだらと長文の報告は結局なにも述べていないにひとしいからです。いま日本の企業の間ではBCP(事業継

続計画)の取り組みが盛んになっています。しかし災害時のマニュアルづくりにとどまっているケースが大半で、情報という視点からクライシス・マネージメンの質を高める必要があります。

# BP:海外企業はインテリジェンスをどのように活用しているのでしょうか?

手嶋氏:モトローラやロイヤル・ダッチ・シェルなどの国際企業は、社内に優れたインテリジェンス・オフィサーを擁しています。インテリジェンス・オフィサーとは、組織のインテリジェンス・サイクルを粛々と回し、トップに的確な決断を促す役割を担っています。欧米の有力企業は、インテリジェンス・オフィサーを特別な研修機関に送ってインテリジェンス感覚に磨きをかけています。教育を担当するのは、CIAやモサドといった情報機関で活躍していた一級のプロフェッショナルです。ハーバード大学のキャンパスで毎年開催されるACIは代表的な研修機関と言っていいでしょう。

インテリジェンスを取り扱う力は、ビジネス・スクールに通うだけでは十分に習得できないと欧米のトップ企業は考えています。ビジネス・スクールで扱うのは、過去に起こった事例をもとに解決策を探るケース・スタディが中心です。インテリジェンスは近未来の事態を適確に予測するための技ですから、過去の素材を研究するだけでは情報感覚は磨かれません。

どうすれば近未来に備える力をつけることができるのでしょうか。意外に思われるかもしれませんが、競馬をお薦めします。競走馬に関する様々なデータから近未来の結果を予測する。これこそまさしくインテリジェンス力を養う格好の教材だと言っていいでしょう。予測の

結果が自らに富をもたらすのですから、 自ずと真剣味も増すはずです(笑)

# 決断する気概を持った リーダーが求められている

BP:日本は外交が不得意だと言われますが、日本の企業が対外交渉力を強めていくにはどうすればいいでしょうか?

手嶋氏:企業を代表して交渉に臨む者は、選り抜かれたインテリジェンスを胸ポケットに忍ばせていかなければなりません。雑多なインフォメーションしかアタッシュケースに入っていなければ、交渉相手に苦もなく付け込まれてしまうでしょう。

日本を代表する大企業が米国で企業を買収する交渉に立ち会ったことがあります。日本語の通訳はインフォメーションもインテリジェンスもともに情報と訳していたのを鮮烈に憶えています。これでは負けてしまう。日本企業の視点から選び抜かれた情報をもつことこそインテリジェンス能力ですから。後に数千億円規模の損失を蒙ることになりました。インテリジェンス・サイクルがまったくと言っていいほど機能していなかったのです。

外国企業との交渉では、何も無理を して英語を使う必要はありません。むし ろ使うべきではないといったほうがよい かもしれません。相手は母国語、こちら は非母国語では、どうしても不利になっ てしまいます。互いに第三国の言葉、 たとえばフランス語で交渉するならイー ブンです。大切な交渉は、選び抜いた 通訳を使って行うべきでしょう。日本の 外交官も、アメリカ政府を相手にすると きは、日本語で交渉していることは意外 に知られていません。もちろん、ディナ ーなどの席では、相手国の言葉でコミュニケーションを図った方が気持ちも通じます。存分に外国語を話したほうが 好感を持たれるにちがいありません。

BP:最後にBP読者に手嶋さんからメッセージをお願いします。

手嶋氏:日本では知識人と言われる人たちほど、「日本の将来は暗い」「中国が一層台頭し日本は取り残されてしまう」と深刻そうな表情をして見せる。そうすれば、なんとなく知的に映るとでも思っているからなのでしょうか(笑)。BBC・英国放送協会が毎年行っている調査でも、日本は「世界で最も信頼できる国」のトップの座を守っています。そう悲観したものでもありません。

世界第二の経済大国中国では、「反日デモ」のような形でしか、共産党の支配体制にモノが言えないのが現実です。また、最も豊かだと思われている米国でも、ディープ・サウスと言われる最貧地帯には月収がわずか200ドルで暮らしている人々が大勢います。病気になっても健康保険がない数千万人の人々がいます。そうした国々と較べても、日本は貧富の差が少なく、全体として安定しています。

最近の日本の若者は海外に行きたがらないとよく言われます。僕だって特派員勤務を命じられなければ、おそらく海外にはいかなかったでしょう。日本国内にいるほうが、遥かに居心地がいいですからね。それほど日本は暮らしやすいと思います。NHK時代には勤めていた機関のほぼ半分くらいは海外勤務だったのですが、まあ仕方がなく出稼ぎに行っていたようなものです。

ただ、いうまでもありませんが、日本の 現状がいまのままでいいという訳ではあ りません。改革は何としても必要です。日本の若者も改革の先頭に立つべきでしょう。日本のリーダーシップはいかにも衰弱しています。「決断するは我にあり」。一国の指導者は率先してインテリジェンス・サイクルを回して、自ら決断する。その決断の結果に自ら責任をとる。こうしたリーダーを生み出さなければ、世界から信頼されている日本が将来も存続していくことは難しいでしょう。いまの日本が抱える最大の問題は、政界にとどまらず、経済界も、教育界でも、未来を切り拓いていくリーダーを新たに育てていくことにこそあると申し上げたい。

BP



手嶋 龍一氏 Ryuichi Teshima

O Profile

外交ジャーナリスト・作家。NHKワシントン特派員として東西冷戦の終焉に立会い、『たそがれゆく日米同盟』『外交敗戦』(ともに新潮文庫)を執筆。これらのノンフィクション作品が注目され、ハーバード大学国際問題研究所に招かれる。その後、ドイツのボン支局長、ワシントン支局長。NHKを独立後に上梓したインテリジェンス小説『ウルトラ・ダラー』『スギハラ・サバイバル』(新潮社)は50万部を超すベストセラーに。最新作は『動乱のインテリジェンス』(佐藤侵氏との対論本)。慶應義塾大学大学院教授。





Windows 8が発売されてから約1カ月が経過した。 新しくタッチUIを搭載したWindowsの評価は良好のようだ。 ビジネス市場でも、Windows 8を搭載したタブレットが注目され、搭載機器の発売が待たれている。 これまで発売されたノートPCやウルトラブックへの搭載も進み、 ウルトラブックの第3世代となる分離・変形可能なモデルも順次発売されている。 年末から来年にかけて、Windows 8を搭載した新製品の発売ラッシュが予定されており、 このビジネスチャンスをどう取り込むかが、パートナー様の腕の見せ所となる。 そこで、本特集では、Windows 8を提案する際に参考となりそうな 目的やシーンに注目し、ポイントを紹介したい。

ThinkPad

# 待望の「Windows 8」がついに登場!

#### ビジネスに有効な機能満載で リプレースを加速させる

Windows 7の登場から3年が経ち、 いよいよ待望の「Windows 8」が登場 した。Windows 8 ProやWindows 8 Enterpriseには、ビジネスパーソンの 手助けとなるさまざまな機能が新設・強 化されている。例えば、効率をさらに高 めたデータの暗号化機能のBitLocker (ビットロッカー)、専用のVPNを構築 しなくても、社内ネットワークへセキュア にアクセスできるDirectAccess(ダイレ クトアクセス)、不適切なアプリを使用さ せないAppLocker(アップロッカー)、セ キュアブート、USBデバイスでOSを持ち 歩けるWindows To Goなど。これらの 機能を目当てに新規導入やアップグレー ドを予定している企業も多いようだ。

また、Windows XPの延長サポート 終了日(2014年4月8日)が迫っている ことも、買い替えやアップグレードへの 強い追い風になる。今でも多くの企業 がWindows XPを使い続けているのは、動作が軽快でありながら、必要最低限の機能は確保できることが理由だと想像できる。また、Windows VistaとWindows 7には「Windows XPへのダウングレード権」付きのエディションがあったので、社内のPC環境を統一するために最新のPCをあえてWindows XPで稼働させている企業もある。

しかし、Windows 8に付与されるダウングレード権で選べるのはWindows 7とWindows Vistaだけ。社内のPC環境をWindows XPに揃えることは事実上不可能になるので、「この機会に、残っていたWindows XP環境をすべてWindows 8に移行しよう」と考える企業が増えることは想像に難くない。

さらに、Windows 8にはPCビジネス の活性化につながるもう一つの重要な 要素がある。それが、新しいユーザイン ターフェース(UI)だ。Metroという開発 コード名で知られていたこの新インター フェースの最大の特長は、タッチ操作に対応していること。Microsoft Office などを使うためのWindows PCでも、スマートフォンやタブレット端末と同じ使い方(タップ、フリック、ピンチアウト、ピンチインなど)が可能になるのである。

もちろん、Windows 8をフル活用するにはタッチパネル搭載のデバイスが必要だ。デスクトップPCの場合は液晶ディスプレイをタッチパネル付きのものに交換する必要があるし、ノートPCの場合はタッチパネル付きPCへの買い替えが前提となる。ハードウェア費用がタッチパネルのぶんだけ増えることは避けられないから、パートナー様にとっては、どれだけコスト効率の高いシステム提案をできるかが商戦の行方を左右することになるわけだ。

そこで、本特集では、「新しいデバイス」「64bitへの移行」「対面営業の提案」「教育現場への提案」をキーワードに、Windows 8の導入提案のポイントをまとめてみた。

# コラム

# もう一つのWindows 8「Windows RT」

Windows 8にはWindows RTという魅力的な"タブレット端末エディション"も用意されている。Windows RTが他のエディションのWindows 8と異なるのは、Windows PCに使われているx86プロセッサではなく、スマートフォンやタブレット端末でおなじみのARMプロセッサで動作すること。小型・軽量・低消費電力のタブレット端末でもWindows 8の大部分の機能を使えるのだから、出張や営業活動に持って行くモバイル機器にはぴったりのWindowsエディションとなることは間違いない。

ところがWindows RTは「x86のプログラムをインストールできない」「ドメインへの参加ができない」といった点に注意が必要だ。Windows 8 Proと同じようには、ビジネスでは利用できない可能性があるのだ。年末から来年の初旬にかけて、続々とWindows RT搭載タブレットのリリースが予定されている。非常に魅力的なデバイスだが、右記の注意点を理解した上で提案したい。



#### Windows RT の注意点

- ▶ デスクトップアプリケーションは 利用できない
- ▶ Active Directoryのドメインには 参加できない



# 導入提案1

# 営業展開を広げる新しいデバイスの追加提案

#### Windows 8の登場で タブレットに注目が集まる

Windows 8は、Windows 7をベースにさまざまな改良が行われたOSであり、より堅牢で使いやすいOSへと進化している。特に目玉といえるのは、タッチ操作に最適化された、新ユーザインターフェースの搭載である。新しいUIは、従来のマウスやタッチパッドでも操作できるが、やはりタッチパネルを備えたデバイスで使うのが一番便利だ。

キーボードを搭載せず、タッチで操作を行うタブレットは、以前から存在していた。例えば、Windows 7は、マウスやタッチパッドでの操作を前提にデザインされているため、タブレットに最適なOSとはいいがたかった。

タブレットに適したOSとしては、AndoridやiOSがあるが、Windowsアプリとの互換性はないので、業務利用には、アプリケーション面での不満があった。しかし、Windows 8搭載タブレットなら、従来のWindowsアプリをそのまま動かせるだけでなく、タッチ操作に最適化された新しいUI対応アプリも利用できる。Windows 8搭載タブレットは、まさに

理想のタブレットであり、ビジネスを強力 にサポートしてくれるツールとなる。

また、Windows 8の登場と期を同じくして、インテルから新たなSoC「Atom Z2760」が登場したこともポイントだ。 Atom Z2760は低消費電力が特徴であり、以前のAtomに比べて、処理性能も向上している。Atom Z2760搭載タブレットは、バッテリ持続時間も7~10時間程度と長く、これまでのタブレットの不満点のほとんどが解消されている。これならタブレットに興味があっても二の足を踏んでいたエンドユーザ様に、新たな営業展開ができるデバイスとして導入提案ができるだろう。

### 用途に応じて使い分けられる 分離・変形可能な新デバイス

Windows 8搭載製品は、これまでのノートPCやタブレットといったカテゴリーには該当しない、分離・変形可能な新たなデバイスも登場していることにも注目したい。例えば、一見普通のノートPCだが、液晶ディスプレイを360度回転させることでタブレットとしても使える製品や、液晶ディスプレイをキーボードの上にスラ

イドさせることでタブレットに変身する製品、液晶ディスプレイを縦に180度回転して閉じることでタブレットになる製品など、ユニークな機構を備えた製品が各社から登場している。タブレットベースの製品でも、標準でキーボード・ドッキングステーションが付属し、ドッキングステーションと合体させることでノートPCとして使える製品が各社から登場している。

これらの新デバイスは、タブレットとノー トPCのいいとこ取りの製品であり、シ チュエーションや用途に応じて、最適な スタイルで利用できることが利点だ。例 えば、オフィスの机の上では、ノートPC スタイルでキーボードを使って企画書を 書き、お客様先ではタブレットスタイルで その企画書を見せて説明するといった 使い方も考えられる。液晶をフラットに 倒せる製品は、画面表示反転機能と 組み合わせれば、顧客と対面でプレゼ ンを行う場合、スマートに相手に画面を 見てもらえる。こうした新デバイスを使い こなすことで、ワークフローの効率改善 や、顧客満足度の向上が期待できる。 新デバイスを活用するシナリオの提案 が、導入案件の獲得につなげられる。

# コラム

# SoC (System-on-a-chip)

インテルから登場したAtom Z2760は、開発コードネームClover Trailとして知られていたWindows 8タブレット向けSoCである。SoCとは、System on a Chipの略で、一つの半導体チップ上に必要な一連の機能を集積したものである。通常のPCでは、PCの機能を実現するために、CPUやチップセットなど、複数の半導体チップが必要になるが、Atom Z2760は、CPUコアを中心にGPU、メモリコントローラ、各種インターフェースなど、PCに必要な機能のほとんどが集積されているため、チップの数を減らすことができ、コストダウンと省電力に貢献する。Atom Z2760を搭載したWindows 8タブレットは、これまで省電力性ではかなわなかったARMベースのAndroidタブレットと比べても、遜色のない駆動時間を実現している。



Atom Z2760 を搭載したレノボの Windows 8 タブレット「ThinkPad Tablet 2」。無線 LAN 利用時でも約 10 時間という長時間駆動が可能

# 導入提案2》》

# OSの32bitから64bitへの移行提案のポイント

#### ハード、ソフトともに 64bitへの対応が進む

Windows 8は、これまでのWindows と同様、それぞれのエディションに32bit 版と64bit版が用意されている(ARM 用のWindows RTは32bit版のみ)。 Windows XPやWindows Vistaの世 代でも64bit版は用意されていたが、 当時は64bitネイティブアプリも少なく、 64bit版ドライバが提供されないハー ドウェアも多かったため、32bit版が 主流であった。しかし、Windows 7世 代では、ハードウェア、ソフトウェアとも に64bit環境への対応が急速に進んだ。 過去のハードウェアやソフトウェア資産を 継承する必要性が低いコンシューマ市 場のほうがこうした環境移行の速度は 速く、2011年あたりから、コンシューマ向 けのWindows 7搭載PCのほとんどが、 64bit版を標準搭載するようになってい る。しかし、ビジネス向けPCでは32bit 版を希望するエンドユーザ様が多く、 32bit版のシェアは依然として高かった。

そのため、現在32bit版のWindows 7/VistaやWindows XPを利用している企業がWindows 8へ移行する場合、①「32bit版のまま移行する」、②「64bit版へ移行する」という2つのシナリオが考えられる。もちろん、これまで32bit版を使っていたのだから、Windows 8でも32bit版を使いたいというエンドユーザ様も少なからずいるだろうが、ハードウェア、ソフトウェアともに64bit対応が進んだ現在、64bitへの移行のハードルは決して高くはない。64bit版でしか享受できないメリットも多いため、Windows 8へのアップグレードや新規導入を考えているエンド



# 64bit版Windows 8で利用できる新機能

#### セキュアブート(Secure Boot)

セキュアブートとはUEFIによって策定された、PCの起動時にデジタル署名済みのソフトウェアしか実行できないようにする技術である。セキュアブートを導入することで、ルートキットのようなマルウェア(悪意のあるソフトウェア)がOSよりも早く実行されて、OSによるマルウェア検出を回避してしまう、といったことを防ぐことができるため、PCのより安全な起動が可能になる。Windows OSでは、64bit版Windows 8で初めてセキュアブートに対応した。

ユーザ様には、64bit版Windows 8の導 入を提案してみてはいかがだろうか。

#### UEFIシステムの真価を 発揮できる64bit版

64bit版Windows 8のメリットとして、 まず挙げられるのが、利用できるメモリ やHDDの制限が事実上なくなることだ。 32bit版では、メモリは最大4GBまでしか サポートされず、しかも実際にWindows で利用できるメモリは3GB強しかない。そ のため、アプリケーションを複数同時に起 動すると、メモリが不足し、ディスクスワッ プが発生してパフォーマンスが低下しや すい。ファイルサイズの大きな動画や画像 などを扱う場合も同様だ。しかし、64bit 版なら、メモリの4GB制限がなくなり、PC に実装されているすべてのメモリをフル に利用できるため、アプリケーションを複 数同時に起動しても、パフォーマンスが低 下しにくい。プロ向けの動画編集ソフトや フォトレタッチソフトなどでは、64bit環境に 最適化された64bitネイティブアプリも増 えており、そうしたアプリではさらなる性能 向上が期待できる。

また、最近のシステムでは、従来の BIOSに代わるファームウェアである UEFIを採用した製品が増えてきている (UEFIについては、P.76の『進化するIT 技術の可能性』を参照)。UEFI環境と UEFIブート対応OSを組み合わせることで、OSの起動が格段に高速化されるだけでなく、セキュアブートと呼ばれるOS 起動時のセキュリティを向上させる機能も利用できるようになる。しかし、UEFIブートに対応しているのは、64bit版の Windowsのみであり32bit版ではその 恩恵を受けることはできない。

このように、64bit版Windows 8には さまざまなメリットがあるが、気になるの は従来のハードウェアやソフトウェアとの 互換性だ。一般的なアプリケーションソフ トについては、ほとんどの場合、32bit環 境で使っていたソフトがそのまま64bit環 境でも問題なく動作するが、ハードウェア の場合、64bit版ドライバが必要になる。 現在までサポートが継続されているハー ドウェアでは64bit版ドライバが提供され ていることが多いが、古いハードウェアで は、64bit版ドライバが提供されていない こともある。64bit版への移行を検討す る場合は、まず、利用しているハードウェ アの64bit版ドライバが提供されている かをチェックすることが重要だ。



# 導入提案3

# 対面営業で効果が期待されるWindows 8搭載タブレット

#### Windows 8搭載タブレットが 注目される理由

iPadが開拓したタブレットというカテ ゴリは、今後も大きく市場が広がると予 想されている。ノートPCでは不満のあっ た「起動が遅い|「持ち運ぶには重い| という点をカバーできるタブレットは、接 客シーンで非常に有効なツールとして 認識されている。例えば、対面販売で カタログを見せながら接客するシーンで は、特に機器のレスポンスは非常に重 要となる。「お客様を待たせない |こと は、最優先されるべきサービスであり、 解決すべき問題だ。これは対面営業を 行っている営業マンにも共通の課題で もある。Windows 8を搭載タブレットは、 起動や終了の高速化、タッチUIによる 新しい操作性により、課題を解決してく れる。

また、これまでのタブレットでは、一台で業務のすべてを遂行することは難しかった。社内では、Windows PCを利用し、外出時にはタブレットを利用するのが一般的だ。

その理由としては、従来のタブレットではWindows PCで利用しているアプリケーションをネイティブに利用することが難しいからだ。また、情報漏えいに対するセキュリティ対策にも不安がある。そのため外出先で社内システムにアクセスできず、不便を感じることもある。後発のWindows 8搭載タブレットが有利だとされる点は、このような問題を簡単に解決できるからだ。

#### タブレットのメリットと Windows 8のメリット

Windows 8搭載タブレットは、社内で使用しているWindows PCとの親和性が高いため、違和感なく導入できる。また、既に構築されたWindowsの管理システムへの導入もスムーズだ。この点にエンドユーザ様は期待しており、パートナー様が提案すべきポイントとなる。提案シナリオとしては、Windowsであることのメリットをお伝えすることで、Windows 8搭載タブレットの新規の導入、もしくは現在利用中のタブレットのリ

プレースを狙う方法がある。

タブレットを導入提案する場合は、携帯性に優れた点や社外でもメールや資料の閲覧ができる利便性をアピールしたい。もう一歩進んだ利用方法としては、動画やアニメーションを使ったプレゼンテーションも効果的だ。例えば、プロモーション映像なら製品の魅力を短時間で伝えられる。他にも、3Dモデリングによるシミュレーションをご覧いただくことで、リフォームの完成形をイメージできる。

さらに意外とカメラ機能を便利に使った事例も報告されている。例えば、建築現場で撮った写真をメールすることで、問題の可視化や作業の進捗状況が一目瞭然となる。また、不動産業なら物件の間取りや照明、水回りの設備を、お客様が現場に行かなくても確認可能だ。

既にタブレットを導入されているエンドユーザ様であれば、このようなメリットは理解されているはずだ。Windows 8 搭載タブレットであれば、これらのメリットをノートPCと同じ管理工数で、しかもセキュアな環境で実現できるのだ。

# Windows 8搭載タブレットの提案シナリオ ■従来のタブレットのメリットとWindows 8のメリットをアピール デスクトップパソコン Windows 8搭載タブレット 社内はデスクトップPC、社外はタブレット ・程くて携帯性に優れる ・起動が速く、レスポンスも良い ・されまでと同じソフトが使える ・セキュリティ対策も万全 ・管理の手間も少ない ・管理の手間も少ない

# 導入提案4

# 授業のTI化を支援! 教育現場への導入提案

### 管理負担を低減する 授業のIT化を提案

総務省の「フィーチャースクール推進事業」と文部科学省「学びのイノベーション事業」では、生徒の情報活用能力の向上や、分かりやすい授業の実現のため、小中学校では一人一台のPCやタブレット、電子黒板(大型タッチディスプレイ)といったデジタルデバイスの導入が推奨されている。導入が決まれば生徒、教員全員分のデバイスの導入が見込め、パートナー様にとって大きなビジネスチャンスとなる。

学校教育での具体的な利用方法としては、生徒たちの授業に対する理解度チェックがある。まず、先生が生徒のタブレットに、振り返り用の小テストを送信。生徒からの回答は瞬時に判定・集計され、問題ごとの正誤率から、理解が進んでいないポイントを可視化できる。次回の授業では、そのポイントをもう一度説明することで理解度を上げる、といった利用方法だ。さらにテスト結果を蓄積し、生徒一人一人の理解度を継続的に把握、きめ細かい指導に活かすことも可能だ。先生が紙でテストを作成・配付し、採点する手

間が省けるというメリットもある。

また、協働学習での活用も期待されている。例えば、理科の時間にいくつかのグループに分かれて植物観察する場合、生徒一人ひとりが気づいた点を、手元のタブレットに書き込んでいく。グループ全員の意見を、電子黒板の画面に簡単に集約することが可能だ。グループごとの意見を電子黒板に写し、クラス全体で共有することによって、考え方の違いを比較しながら理解を深めることができる。もちろんタブレットからインターネットに接続し、さまざまな情報を収集する力を付けることも可能だ。

生徒に一人一台のタブレットやPCを 導入するとなると、学校が心配するの は管理方法。授業や生徒指導、学校 行事など多忙な日々を送っている先生 方への負担をきるだけ減らすことが、ポイントとなる。

## 管理負担を低減する 新しいWindows

Windows 8 ProならActive Directoryによるドメイン管理が可能だ。

すでに構築している Active Directory環境にそのまま参加できるため、新たな管理 工数は発生しない。また、Windows Server 2012 とWindows 8 には、「Windows PowerShell 3.0」が採用され、Active Directory環境の展開や構成、管理がさら に容易になっている。Active Directory に保存されたユーザやデバイスのプロパティに基づいて、生徒、教員、システム管理者といった、権限に合わせたアクセス制御が容易に可能だ。

このようにWindows 8には管理に負担をかけない機能を実装している。さらに、学校には独自に開発・導入したソフトがあまりないことも企業ユースとの違いだ。そのため、OSを一括して入れ換えたとしても、その負荷は少ないと予想できる。

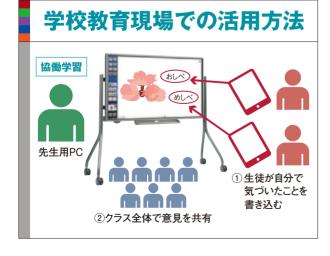
PCやタブレット、サーバを含めた一括 導入が一般企業よりも受け入れやすいた め、提案する価値は十分にありそうだ。

#### 実社会でも評価される 資格講座にも注目

初等教育から、大学を中心とした 高等教育へ視点を移してみると、より 実践的な資格の取得に力を入れる学校もある。例えば、『Microsoft Office Specialist(MOS)』試験講座を開講 している大学だ。MOSは、Microsoft Office製品の利用スキルを認定する資格で、就職活動の際、技能をわかりやす くアピールできるため、学生の人気が高い。ある大学では、入学時にWindows OSとOfficeソフトをインストールしたPC を生徒に配付。利用方法の教育に力を 注ぎ、資格の取得率を向上させている。

大塚商会でもこのような人材育成サービスを提供している。機器の導入と同時に人材育成サービスを提案することで、ビジネスボリュームを拡大できる。エンドユーザ様にもパートナー様にメリットが多い人材育成サービスを、ぜひ活用していただきたい。

『記』





# 第2特集

# Windows XPからのリプレース OS移行の は長またってント

2012年10月26日、ついにWindows 8がリリースされた。

企業のクライアントPCとしてだけでなく、

モバイルでの利用や労働環境の改善などでも期待が高まっている

新OSを企業にお勧めするポイントはどこにあるのだろうか。

Windows XPのサポートの問題や業務システムの移行など、

ポイントとなる点を考えながらベストな移行を考えてみよう。

また、あえてWindows 7を選択することや、

新たな業務改善の一手としてWindows 8をお勧めする

訴求ポイントも紹介したい。







# XP のサポートは2014年4月8日に終了

■ネットワークへの参加を拒まれて利用できなくなる!?

# 未だにシェアの高い Windows XP

発売から10年以上経っている Windows XP。現在でも「Windows XP の環境で業務に支障がない|「自社で開 発した業務ソフトがWindows XPでしか 動かない」といった理由で、利用してい る企業は多い。LinuxやMacを含めたす べてのOSの利用状況調査は世界中で 行われ、さまざまな調査結果が報告され ているが、Windows XPのシェアはいず れも45~60%と依然として高いシェアを 維持している。利用者としては、問題が なければ、このまま使い続けたいのだが、 Windows XPのサポートは2014年4月で 終了することが決定しており、その後は、 ビジネスでの利用はもちろん、個人で利 用する上でもリスクは大きくなる。

まず、サポートが切れると、OSの不具合やセキュリティホールが見つかった場合の対策となる更新プログラムが提供されなくなる。さらに、Windows XPは新しいソフトウェアや周辺機器を利用できなくなる可能性がある。

#### ◆サポートが切れると…

- ・OSに不具合が見つかっても改善されない
- ・新しいWebブラウザが使えず高リスクを負う
- ・最新のセキュリティソフトが使えない

サポートの切れたOSを使い情報漏えいが起こった場合の責任は重大だ。それを防ぐ方策として、サポートの切れたOSは、ネットワーク参加を拒絶される可能性がある。ネットワークに接続できないPCで業務を遂行することは難しい。このような状態は、ビジネスで利用できないことを意味する。

#### OSのリプレースを推進する 導入シナリオが必要

さまざまな理由でWindows XPを使い続けているエンドユーザ様にとっても、Windows 8の登場は、OSのリプレースを検討する好機といえる。タッチ操作に対応するWindows 8は、タブレットに搭載することで、デスクトップPCやノートPCとは明らかに違う利便性で、ビジネスの生産効率の向上に貢献できるからだ。

パートナー様にとっても新しい機器と同時にOSのリプレースを提案することで、ビジネスの拡大につなげられる。そのためにも、2014年4月にWindows XPのサポートは終了し、以後、利用することにはリスクが伴うことを説明したい。その上で、Windows 8を導入することのメリットをお伝えしたい。

例えば、Windows 8 Pro、Enterprise を搭載するタブレットは、Active Directoryが管理するドメインに参加できる。これまでデスクトップPCやノートPCで行っていた管理のイメージをそのまま適用できることになる。さらに、ハードディスクの暗号化や、VDI(Virtual Desktop Infrastructure)を利用することもできる。携帯性に優れたタブレットの紛失や盗難のリスクをOSの機能で回避できるのだ。

その結果、外回りの多い社員や、在宅 勤務の支援といった活用をセキュアにでき るというシナリオが提案できる。ノートPCや スレートPCであれば、Windows 7でも実 現できていたが、タブレット端末で可能と なったことに価値があることを説明したい。

# **≫** Windows のサポートライフサイクル

Windowsのビジネス用製品は、基本的に発売日以降、5年間のメインストリームサポートと5年間の延長サポートの合計10年間のサポートが受けられるようになっている。例えば、コンシューマ用のWindows XP Homeは無償サポートを5年間しか受けられないが、ビジネス用の

Windows XP Professionalは10年間のサポートが受けられるのだ。ただし、Windows XPはコンシューマ市場とビジネス市場の両方で広範囲で使われていたため、特例として12年半のサポートが続けられ、2014年4月8日までのサポートとなっている。

#### ◆サポートライフサイクルの例



※この例はサンプルであり、特定の製品を意図しているものではありません





# Windows 8のシステム要件とソフトウェアチェック

■ファイルや設定の継承は、移行ツールが便利

# システム要件は Windows 7とほぼ同等

Windows 8のシステム要件は、 Windows 7とほぼ同等のものとなって いる。

この条件は、それほど高くない。 Windows 7を利用できるシステム 環境であれば問題なく利用できる。 Windows XPの場合は、PCを入れ替 えたほうがよいが、ここ数年で調達さ れている場合は、上記の要件を満たす ケースもあるだろう。

なお、Windows 8では、プロセッサが物理アドレス拡張(PAE)、NXプロセッサビット(NX)、ストリームSIMD拡張機能2(SSE2)をサポートしていることが必要であるので注意したい。また、

#### ◆ Windows 8のシステム要件

プロセッサ	PAE、NX、SSE2をサポートする1GHz 以上のプロセッサ
RAM	1GB(32ビット)または2GB(64ビット)
ハードディスクの空き領域	16GB (32ビット)または20GB (64ビット)
グラフィックカード	Microsoft DirectX 9グラフィックスデバイス(WDDMドライバー付き)

タッチ機能を使う場合は、ディスプレイがマルチタッチに対応していることなど、使う機能によっては、新たなハードウェアを調達する必要があることの説明が必要だ。

### ■ アップグレードアシスタントを ■ 活用する

新しいOSを利用する場合は、これまでの環境やソフトウェアを利用できるかが重要だ。マイクロソフトでは、インストール前に対応状況が確認できる

「Windows 8アップグレードアシスタント」を提供している。

アップグレードアシスタントでは、ハー ドウェア、アプリケーション、周辺デバイ スなどがスキャンされ、Windows 8でも 正常に動作するかどうかを検証できる。 検証後は互換性レポートが作成され、 印刷することも可能となっているので、 Windows 7からWindows 8に移行す る場合は、新しいOS(または新しいPC) になっても現在使っているアプリケーショ ンや周辺機器が使えるかをチェックした い。アプリケーションや周辺機器は、現 在対応していなくても、今後対応するこ とも考えられるので、サードパーティの サポート情報もしっかりとチェックしてお きたい。ちなみにアップグレードアシスタ ントは、Windows 7のファイル、アプリ、 設定をWindows 8に移行するために 作られたものなので、Windows XPや Windows Vistaでは利用できない。

Windows XPやWindows Vistaからファイルや設定をWindows 8に移行するには、「Windows 転送ツール」が便利だ。Windows 転送ツールでは、移動するデータについていくつかの質問に答えるだけで、データを自動的に転送できる。Outlook Express、Windows Mail、または Windows Live Mail からメールと連絡先をクラウドに移動する方法もあるので、エンドユーザ様にお知らせすると良いだろう。





# Windows 8の効果的な提案ポイント

■実際に触ってもらうことが採用の近道

#### 発売1カ月後、 Windows 8の評価

発売から1カ月が経過したWindows 8の評価はどうなのだろうか?

コンシューマでは、タッチ対応の液晶 パネルの供給が不足するほど、プリイン ストールモデルの人気が高い。そのた めビジネス向け商品の供給が不安視さ れるほどだ。

実際にWindows XPからWindows 8に切り替えたエンドユーザ様の感想と して、「Windows 8って(XPと比較し て)、こんなに速くなったんだ |という声 がマイクロソフトに寄せられているそう だ。現在、Windows XPをご利用中の エンドユーザ様のPCは、4~5年前の モデルである可能性が高い。業務の支 障がないという理由で使い続けてきた エンドユーザ様にとって、新しいデバイ スと、Windows 8のパフォーマンスは、 目に見えて向上していている。

パートナー様がエンドユーザ様にOSの 入れ替えを提案する際、この点をアピー ルしてはどうだろうか。Windows 8搭載 のタブレットやウルトラブックを携帯し、起 動、終了、スリープからの復帰、そしてタッ チパネルの操作を実演することで、そのメ リットは十分に伝えることができる。もし可 能ならシステム担当者にサンプル機を貸 し出すことも効果的だ。なぜなら、一度、 レスポンスの良いPCを使ってしまうと、必 ず古いPCに不満が出てくるからだ。

また、デスクトップPCのタッチパネル の導入も、今後の提案ポイントとした い。指先で操作するタブレットを利用し 始めた頃、無意識にタッチ非対応の画 面を触ってしまった経験はないだろう か。指で直接操作する入力方式は、直 感的で分かりやすく、簡単に操作でき る。この利点は「あると便利 |というより は、「ないと不便」に思えるほど利便性 が高い。もちろん、マウスとキーボード を使ったほうが便利な操作もあるので、 状況に応じて、最適な入力方法が選べ るWindows 8は、自信を持ってオスス メできる商品なのだ。

#### ダウングレード権付きの Windows 8

今後のPC販売は、Windows 8をプ リインストールしたPCが中心となり、特 に理由がなければWindows 8モデル がファーストチョイスとなる。ところが、 さまざまな理由で、エンドユーザ様が Windows 7の利用を希望した場合は、 どうすればいいのか。

この場合は、PCメーカーが提供する ダウングレードモデルの利用が便利だ。 ダウングレードモデルとは、Windows 8 をインストールしたPCをWindows 7にダ ウングレードできる権利を付加したPC、 もしくは、メーカーがダウングレード権を 利用して、Windows 7をインストールし、 Windows 8を付属するPCのこと。当面 は、このモデルも販売されるはずだ。

年末商戦はもちろん、来年の期末決 算の時期や、入学・入社シーズンで、大 きなリプレース需要が見込まれる Windows 8。 商機を逃すことのないよ う、今から準備したい。 BP

# ≫ Windows 8 の提案ポイント



タッチ操作に対応する新しい画面

ポイント

新しいデバイスとOSの パフォーマンスを実演







これまでと同じ作業環境

直感的で分かりやすい タッチ操作をアピール

7の希望にはダウングレード 権付きのWindows 8



*IT Keyword* ፟፟፟፟**頌 最新ITキーワード** 

# 勤怠管理システム

[Diligence-and-Indolence Managerial System]

従業員の出勤と退勤時刻。各種のデジタル機器で直接に記録する勤怠管理システムを併用することにより、 人件費などのコストを削減できる。

経理や財務会計と並ぶ基本的な企業情報システムに、給与計算がある。それほど複雑なシステムではないので社内でも開発できるが、税制や社会保険料が変更されるたびに計算表(テーブル)や計算プログラムを書き換える必要があるので、保守サービス付きの市販ソフトウェアパッケージの利用が便利だ。

給与計算システムを使うには、まず、給与体系をテーブルに登録し、採用や定期昇給などのタイミングで従業員の号俸をデータベースにアップデートする。さらに、毎月一定の日(給与データ締日)までに全従業員の勤怠情報を入力すると支給額が算出されて、給与振込用のデータができあがるという流れだ。ここで問題になるのが、従業員の勤怠情報を効率的にインプットするための方法である。

もっとも単純なやり方としては、タイムカードに打刻された出勤と退勤の時刻をキーボードから入力するという方法。どの給与計算ソフトウェアにもそのための画面があるし、インポート機能を備えた製品ならMicrosoft Excelなどで入力したデータをCSVファイルなどで取り込むことも可能だ。

しかし、キーボードから入力するやり方では時間と手間がかかるし、なにより入力ミスによる勤怠情報の間違いは、従業員の労働意欲を削ぐことになりかねない。そこで、勤怠情報のインプットに機能を絞った「勤怠管理システム」を給与計算システムと併用する企業が増えてきた。

勤怠管理システムのポイントは、出勤と退勤時刻を自動的に取得して保存し、そのデータを給与計算システムに直接に取り込めること。タイムカードを見ながら入力しなくて済むので、人件費や外注費などのコストを削減し、正確な勤怠情報をタイムリーに取得できるといったメリットが

得られる。ASPやSaaSとして提供されるものを選べば、社内にサーバを置く必要もない。

勤怠情報を自動取得するための仕組みには、さまざまな製品やサービスがある。もっとも安全で確実なのは、PC接続型のタイムレコーダを使うタイプ。タイムカードへの打刻や、磁気カードやICカードでスキャンした時の時刻情報をタイムレコーダ内のメモリに記録しておき、USBケーブルやメモリカードを使ってPCにデータを送り込む方式だ。昔からある機器なので誰でも容易に使用でき、システム障害が発生していても勤怠情報は記録できるという安心感がある。

製品選びのポイントとしては、個人の識別と場所の特定をどのように実現するかという2点が挙げられる。

スマートフォンやICカードの場合は、その内部に組み込まれている個体識別コードと従業員を"紐付け"しておけば個人の識別が可能。PC画面方式なら、確実な個人認証システム(ICカード+Active Directoryなど)があれば事前の紐付け処理は不要だ。タイムカードの場合は、タイムレコーダの機能でタイムカードに識別コードを印刷し、月初に一人ひとりに配るという手間がかかる。

また、どこで勤務したかを正確に把握する必要がある場合は、オフィスや作業場所の入り口にタイムレコーダ、ICカードリーダ、指紋スキャナなどを設置して記録する方式が前提。一方で、テレワークやフリーアドレスを採用している企業には、どこにいても出勤や退勤ができるスマートフォンやPC画面方式が向く。

勤怠管理システムのデジタル化は、比較的に敷居が低くアプローチしやすい。取引のとりかかりとして、エンドユーザ様の勤怠管理状況を調査してみてはいかがだろうか。



#### Possibility of IT basic technology

進化する

# 

text by 石井英男

1970年生まれ。ハードウェアや携帯電話などのモバイル系の記事を得意とし、IT系雑誌やWebのコラムなどで活躍するフリーライター。

# BIOSに代わる 新たなファームウェア「UEFI」とは?

Windows PCでは、長らく「BIOS」 (Basic Input/Output System)と呼ばれるファームウェアが使われてきた。BIOSの主な役割は2つある。一つは、起動時にハードウェアのチェックと初期化を行い、OSの起動プログラムを呼び出す役割だ。もう一つは、OS起動後、HDDやディスプレイ、キーボードなどの基本的なハードウェアの制御を行う役割だ。このようにBIOSは、PCにとって非常に重要なプログラムだが、1984年に登場したPC/ATから受け継いだ遺産でもあるため、さまざまな制約がある。特に厳しいのがメモリ容量で、Intel 8086互換のリアルモードで動作するため、1MB以下のメモリしか利用できず、高機能化するハードウェアへの対応が困難になってきた。

そこでBIOSに代わる新しいファームウェアとして開発 されたのが [UEFI] (Unified Extensible Firmware Interface) である。 UEFIの前身となったのは、インテル がHPと共同で開発したEFIである。EFIは2000年に発 表され、IA-64 CPU[Itanium]搭載サーバに採用された が、普及には至らなかった。そこで、インテルは2005年に EFIの標準化と普及を推進する業界団体「United EFI Forum」を結成し、同時に名称もEFIからUEFIに変更し た。UEFIは前身のEFIから数えると、10年以上の歴史 を持つが、本格的に普及が始まったのは2011年夏あた りからである。2011年春にインテルから登場したチップ セット Intel 6シリーズ の特徴の一つが、UEFIへの対 応であり、各マザーボードベンダーからUEFI採用製品が 次々とリリースされた。さらに、OS側のUEFI対応が整っ てきたことも、UEFI導入を後押しした。UEFIからブートす るにはOS側の対応が必要だが、マイクロソフトのOSで は、Windows Server 2008の64bit版で初めてUEFI に対応し、クライアント向けOSでは、Windows Vista SP1 64bit版で初めてUEFIに対応した。さらに、最新の Windows 8 64bit版ではUEFIブートへの最適化が進 み、UEFI環境では非常に高速に起動できるようになった。 なお、Windowsでは、64bit版のみがUEFIをサポートして

おり、32bit版はUEFI非対応であることに注意したい。

UEFIのメリットはいくつかあるが、その中でもわかりやすいのが、2TBを超える大容量HDDを起動ドライブとして使えることだ。BIOSベースのシステムでは、HDDをMBR (Master Boot Record)と呼ばれる32bitの管理方式で管理しているため、最大2.2TBまでしか1つのパーティションとして扱えない。しかし、UEFIベースのシステムでは、GPT(GUID Partition Table)と呼ばれる64bitの管理方式を採用しているため、最大9.4ZB(ゼタバイト)※という広大な領域を管理できる。また、UEFIでは、メモリ容量の制約がなくなるため、設定画面を従来のテキストベースではなく、グラフィカルでわかりやすいインターフェースにすることが可能だ。マウス操作に対応した製品もあり、初心者にも親切になっている。さらに、セキュアブートと呼ばれるOS起動時のセキュリティを向上させる機能に対応していることもUEFIのメリットだ。

このようにUEFIのメリットは多いが、当初のUEFI環境は、ファームウェアやドライバの完成度が低く、起動が遅くなったり、ハングアップするといった不具合が起こることもあった。基本的には従来のアプリケーションは問題なく動作するはずだが、ドライバ周りにバグが残っている可能性もある。また、ディスクユーティリティなどは、MBRにしか対応していない製品もあるため、注意が必要だ。UEFI環境への移行を考えているのなら、十分に検証を行ってから移行することをお勧めしたい。



UEFI採用マザーボードの設定画面の例。アイコンやグラフが多用されており、グラフィカルでわかりやすい。※1ZBは1,024の三乗=1,073,741,824TB